令和6年5月31日開催

新清流　行政ラーニングシステム

伊那小学校の取り組みについて

「内から育む」

講師：田畑　浩人　氏

目次

1. **講師について**
    - 伊那小学校での総合学習の取り組みを率いた講師の紹介。
2. **子どもたちの表情**
    - 子どもたちの学習姿勢や表情から見える学びの深さについて。
3. **他の学校との差異は何か？**
    - 伊那小学校の特徴的な教育システムについての解説。
4. **「未完の姿で完結している」**
    - 伊那小学校の子ども観や教育姿勢に関する考察。
5. **教師の役割**
    - 教師が総合学習を通じて子どもたちの内なる力を引き出す方法について。
6. **学習指導要領との関わり**
    - 伊那小学校の総合学習が学習指導要領とどのように関連しているか。
7. **学力からの評価**
    - 総合学習における学力評価と全国学力テストの結果についての考察。
8. **伊那小学校を支えるもの**
    - 伊那小学校の教育姿勢を支える人間関係や教育の歴史について。
9. **知ることと感じること**
    - 子どもたちの学びを感じることの重要性についての考察。
10. **総括**
    - 伊那小学校の取り組みから得られた教訓と、今後の教育への示唆について。

今回は、長野県伊那市から講師を招聘した。総合学習の取り組みが全国的に注目されている伊那小学校。昨年度、伊那小学校での公開発表会があったが、その折に参加した栗原出身の二階堂氏から、内容の共有と、取り組みの素晴らしさを伺い、栗原でも取り入れたいと考えられる内容であることを知る。そこから、今回の研修開催に向けて何度か会議を重ね人選やテーマなどを決め、本日の開催となった。市の教育発展のためにご協力いただいた二階堂氏、講師を引き受けていただいた田畑氏には感謝を述べたい。

講師について

今回、伊那小学校での総合学習の取り組みを「内から育む」といったテーマで講演いただいた。講師は今年 3 月まで伊那小学校にて現役の教員であった田畑浩人先生。NHK での取材や、教育関連雑誌への寄稿など、教育の研究と実践が評価されている。

子どもたちの表情

講演の始まりは、子どもたちの授業中の写真が数枚流される。動物との触れ合い、自然の中での活動、そのどの写真にも共通して言えるのが、子どもたちの表情の豊かさ、取り組みに没頭している姿、子どもが持っている本来の力を感じる。見方によっては勉強ではなく遊びに没頭している姿にも捉えられ、学びといえるのかと言う人も出るだろうと想像する。取り組みの評価方法として、世の中で言われている点数的な学力というもので測った場合どうなっているのか。学びになっていなければ低い水位となるだろうが、伊那小学校が低いということはない、むしろ応用系の問題については高い水位となることが多い。

他の学校との差異は何か？

伊那小学校のシステム的な特徴としては

・通知表がない s.31～

・総合学習(時間割がない)s.53～

・チャイムがならない s.54～

通常の学校では想像もつかない仕組みであるが、前述の子どもの力を引き出していることと含めて考えた時、それを可能にするのは根底に存在する考え方が重要だ。

「未完の姿で完結している」

大槻　武治

ああでなければならない
こうでなければならないと
いろいろに思いをめぐらしながら
子どもを見る時
子どもは実に不完全であり

鍛えて一人前にしなければならないもののようである

いろいろなとらわれを棄て
柔らかな心で子どもをよく見るとき
そのしぐさのひとつひとつがじつにおもしろくはじける生命のあかしとして目に映ってくる
「生きたい、生きたい」
「伸びたい、伸びたい」
と全身で言いながら
子どもはそこに未完の姿で完結している。

伊那小学校の教育は「はじめに子どもありき」であり、未完の姿で完結しているといった「子ども観」にある。通常、大人が単一の項目に基づいて能力を評価するが、その評価は大人の視点に基づいている。伊那小学校の「子ども観」では、「子どもは自ら求め、自ら決め出し、自ら動き出す力を持っている」と考え、子どもたちが内に秘めている自らの力で学び育つことを重要視している。

教師の役割

伊那小学校では、子どもの内なる力を引き出すために総合学習を取り入れている。時間割はなく、子どもたちとの対話の中から学習内容が決まる。時には当日の朝にテーマを決めることもある。教師は、子どもが興味を持つテーマを基に、教育的な材料としてどのように活用できるか考える。このような視点があるからこそ、学習指導要領で求められている内容をヤギの飼育などの活動を通じて達成できるのだ。そのため、学習指導要領を理解することが教師に求められる。
子どもたちが与えられた勉強から、自発的な学びへと変換される際、彼らの中には多くのものが経験として残る。卒業生の中には、大人になっても小学校時代の授業を鮮明に覚えている人が多いのもそのため。自分の中から生まれた問いに取り組むことが習慣化されるため、子どもたちは自ら課題を見つける能力を身につける。これは、今後の社会で重要な能力である。

学習指導要領との関わり

栗原市では教科書を用いた単元制の授業を行なっている。対して伊那小学校は教科書を主としない総合学習型の授業となる。教科書はあくまで、学習指導要領を達成するためのツールであり必須項目ではないとのことであった。学習指導要領の内容をどのような「材」で行うかは自由であり、それを総合学習として取り入れているのがいな小学校なのだ。

学力からの評価

総合学習が主ということで、いわゆる教科書などの机に向かうタイプの授業は少ない。そうなると、学力が心配される。一つの指標として全国学力テストの値があるが、伊那小学校は平均的な位置にあり、応用問題を扱う B 問題においてはむしろ高評価が多いことから、数量的に測られた場合においても総合学習における学習方法が単元に比べて劣っているということは見受けられなかった。

伊那小学校を支えるもの

「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そとからではない、うちからである。児童のうちから構成されるべきものである。」大正初期の長野県師範学校の淀川茂重の言葉である。これを源流とした現在の伊那小学校の取り組みが脈々と続いてきている背景には「子ども観」もあるし、教員の「同僚性」と呼ばれる横のつながりによる教育の志が共有されていることも重要であろう。教員同士の人間関係の中でのフォローアップであるが、職員の抱える課題を一人で抱え込ませず、周りに相談できる体制づくりを行う事で、初めて総合学習を指導する教員も育っていく。さらに伊那小学校の不易流行の変わらない部分が引き継がれていくようだ。校長になる人材も基本的に伊那小学校を経験した人物から選定されるとのことで、伊那小学校の教育指針を保持している。

知ることと感じること

レイチェル・カーソンの「センスオブワンダー」において、「知ることは、感じることの半分も重要でない」という内容がある、知ることを軽んじているわけではなく、感じることの方が影響が多いということであろう。伊那小学校の教育はまさに、感じることで学びを向上させているのだ。それは、今回資料として示された、児童の笑顔だけでなく、作文の内容や、詞や絵などの製作物からも伝わるものがあった。学校で学んだことを頭で理解するのみでなく、自分ごととして体験しているからこそ表現できる内容であるのだ。

総括

今回、伊那小学校の取り組みを聞く中で、これは栗原でも取り入れたいという部分が多々あった。教育的な子どもへの姿勢、教員に求められるスキル、子どもたちが得られる学び。その多くは、特別な地域性や予算を必要とする内容ではなく、教育理念から始まる子ども本位の教育という考え方に由来するものであった。学力偏重の時代があり、現在の教員も子どもたちも笑顔が失われた学校という枠組みに疲弊しているように思われる。しかし、笑顔の中で、学びを深く、高く取り組み、その後の学力に繋げている実例が伊那小学校にあった。栗原は大いなる自然に恵まれた土地であることから、体験型の授業は得意とする分野ではないだろうか。子どもたちの学びとは何かを再考したとき、今のあり方は変えていかねばなら

ないのではないかと考える。子どもを型にはめるのではなく、子どもが伸びたいように伸びさせてどこまでも大きくなるように育てる。栗原市でも大人が良いとする子ども像ではなく、子どもが本来の姿で取り組みを進めるべきではないだろうか。取り組みのその先には、学びの中に子どもの笑顔があふれ、それにやりがいを見出す教員の姿、それを信頼する親の姿が想像できる。今後の教育行政に資する講義であった。